

かしま医療過疎

島・へき地支える

⑤

2月中旬、瀬戸内町の南大島診療所。常森将史医師(30)は、外来で訪れた脳出血患者の処置に追われていた。急いで血圧を下げ、出血を抑える必要がある。しかし、降圧薬の在庫はわずかだ。治療には十分でない。奄美市に系列の病院はあるが、薬が届くまで1時間はかかる。

看護師はすぐに、近くの瀬戸内徳洲会病院に電話を入れた。「降圧薬を貸してほしい」。10分ほどで薬が届き、患者は危機を脱した。入院したが、2週間後に退院した。

患者が限られるへき地の診療所は、医薬品の在庫を多くは抱えられない。坂口美也子所長(39)は「電話一本で連携、協力できる。とても心強い」と強調した。

一方の瀬戸内徳洲会病院。整形外科は医師が非常勤のため、診察は1カ月数日に限られる。医師不在の間、手助けするのは、整形外科が専門で、同町古仁屋地区の唯一の開業医、いづはら医院の桂久和院長(47)だ。徳洲

共存



桂久和医師(左)と瀬戸内町古仁屋の休日当番の合間に入院患者の処置をする

会から医院にレントゲン写真を持ち込まれ、診断してギプスなどの必要があれば、徳洲会に行つて治療する。

徳洲会病院の北原淳詞副院長(57)は「手術室もほかの医療機関の医師に使ってもらつていい」と話す。桂院長も「互いの顔が見えて患者を紹介しやすい」と信頼を寄せる。

地域が「総合病院」に

同町は、加計呂麻や請与路島を抱える離島の中の離島。町内には6医療機関しかなく、うち古仁屋地区の4機関(常勤医師10人)で休日当番を組んでいる。かつて、徳田虎雄氏、保岡興治氏の国政選挙をめぐる「保徳戦争」や、病院建設をめぐる対立してきた医師会と徳洲会が、協力的体制を敷く県内でも珍しい地域だ。

休日日当番は2003年夏、徳洲会病院の当時の院長らが中心となって始めた。桂院長は「15年ほど前は、競つてばかり。しかし、少ない医療資源を有効に使うには、協力するしかない、という思いで一致した」と振り返る。

2月21日。当番医となつたいづはら医院には、朝から患者が次々訪れた。発熱やけが、ねんざなど、この日具合が悪くなったり、けがをした人ばかり。転倒して頭を打った80代女性は「夜痛くなつたら大変。当番医で診てもらえると安心して話した。」と話した。

桂院長は「医師がもとも少ない離島やへき地でも、医療機関の協力や連携が実現できれば、地域が総合病院になる」と力を込めた。

県内の医師不足に悩むほかの地域でも、医師会と徳洲会の協力を探る動きが広がり始めている。

社会部・浦牛原 健
濱田 朋美

|| おわり ||